

11月25日に、WAM 助成事業の一環として研修会を開催し、約30名の方にご参加いただきました。

講師には、宮崎市議のくろだ奈々氏と、県立看護大学教授の川村道子氏をお招きました。

くろだ市議は、市議になる以前から親子支援に深く携わり、「NPO 法人ドロップインセンター」を設立されています。そのご経験から、今回の助成事業が掲げる「不登校・ひきこもり家庭への支援」に強く共感され、8月から毎月行っている事例検討会にも継続して参加いただいている。

事例検討会の中で、訪問看護師が家族や子どもと実際に関わる現場を知ることにより、訪問支援が不登校支援として非常に有効であると認識していただきました。

また、助成事業には期間的な制約があることを踏まえ、行政として継続可能な支援体制一特に訪問看護師による訪問支援の制度化一が必要であるとお話くださいました。

特に重要なポイントとして次の点が挙げられました。

- 不登校の長期化によって起こり得る二次障害（精神疾患）の予防
- 訪問看護師が関わることによるメリット
  - ・医療介入の必要性を判断できる
  - ・必要となった場合でも、「普段から関わっている信頼できる人」から支援が受けられる
  - ・看護師は生活支援の専門職であり、家庭の中で生活面からも寄り添った支援が可能

これにより、現状で支援が届いていない家庭への支援を拡げることができるとの提言もいただきました。

また、県立看護大学教授の川村氏からは、「不登校の児童・生徒がどのような心身の状態にあるのか」について、体系的な分析をもとにご講演いただきました。

不登校のきっかけとして「不安」や「無気力」が多いとされていますが、子ども自身はその理由を言葉にできないことが少なくありません。

川村氏は、その点に着目し、「何が子どもたちの不安や無気力を生み出しているのか」を丁寧に説明されました。

特に、「人は、理解されない状況では自分を守るために話さなくなる」という視点が示されました。五感を通じて受け取る情報を脳が処理する際、つらさや不安につながる情報があると、本人の意志とは関係なく身体が反応し、さまざまな症状が現れることがあります。

その結果、外部からの情報を遮断し、自分を守る手段として「学校に行かない」という選択が生まれる。これが不登校の本質的な意味であるとお話をされました。

こうした状態にある子どもたちにとって、「わかってもらえる人」の存在が何よりも重要です。

その役割を担えるのが訪問看護師であり、家庭に入り親子に寄り添うことで、安心・安全な関係を築きながら伴走支援を実践できることが求められています。

また、子どもが「信頼できる」と感じる関係を築くためのポイントとして、以下の4つの視点が示されました。

①ほめ方を工夫する

- ・具体的にどのような点がよかったか伝える
- ・結果だけではなく努力した過程を褒める
- ・できたことを見つけてあげる

②子どもどうしたいか選ばせる

- ・子供の意見を聞くことで、自分の意見を聞いてもらえるという意識になる
- ・「自分で決めた」という大きな達成感を味わえる

③あえて失敗を経験させる

- ・失敗経験が少ないと大きな失敗をした時に立ち直れない
- ・失敗したときは、一緒に再チャレンジする

④何もしない時間を保障する

- ・ぼんやり考える時間を作ることで、ひらめきや集中力が高まるだけではなく自己効力感を高めることができる

という4つの視点が提示されました。

今回の研修を通じ、訪問看護師による「訪問型の伴走支援」が、不登校の子どもと家族にとって、非常に適した支援であることを、くろだ氏と川村氏によって実証していただき、参加者全体で理解を深める機会になりました。今後、本助成事業で得られた知見を行政と共有し、持続可能な支援体制の構築につなげていくことが求められていると思っています。